

解答

- ① 1 例年 2 底辺 3 良い 4 努める 5 寒冷
 6 青果 7 利用 8 省く 9 古典 10 祝日

- ② 問一 1 イ 2 エ 3 ア 4 ウ
 問二 1 エ 2 イ 3 ア 4 ウ
 問三 1 オ 2 エ 3 イ 4 ア 5 カ 6 ウ

- ③ 問一 A イ B イ C ウ

問二 エ

問三 [早く長命湯に行って、] やめてしまうのがほんとうかどうかききたかったから。

問四 1 長命湯のおやじさん 2 質問 3 ことば

問五 エ・オ (くんで不順可)

問六 エ

問七 い

- ④ 問一 A ゆとり B ならむようにながめた

問二 エ

問三 おとうさんがテレビが来ると言ったことを、じょうだんだと思ったから。

問四 まるで、空

問五 1 うまにして 2 エ

問六 エ

解説

③ 出典は、砂田弘「街はジャングル」〈草土文化〉。

問二 直後に「自分でもおどろいたほど、卓司たくじの声は大きかった」とあります。「長命湯ちやうめいね、今月かぎりではめるんだって」という言葉が信じられず、おどろいたのです。

問三 時間が過ぎるのが長く感じられるときは、たいくつなとき、もしくは待たされているときが多いといえます。早く長命湯に行きたくて仕方がなかったのです。

問四 直前に「さて、だれが質問しつもんするか。いざとなると、ことばが口をついてでてこない」とあります。質問する相手は「長命湯のおやじさん」です(19行め)。

問五 直後の「ずいぶんがんばったんだがね。お客はへるいっぱいだし、あとつきもない」「それにわたしも、もうトシだ。人生八十年として、あと六、七年というところかな。のこされた時間を、ばあさんと二人で、静かなところでくらしたいと思ってね」に注目できましたか。

問六 直後を読むと「卓司につづいて、鉄男と勉もこっくりうなずいた。三人とも、いまにもなきだしそんな顔だった」とあります。三人は、長命湯が終わってしまうことがさびしくてたまらないけれど、最後の日まで見届けようと思っています。

問七 37行めで長命湯のおやじさんが登場しますので、ここで場面が分かるといえます。

④ 出典は、住井すゑ「テレビとうま」(『住井すゑ わたしの少年少女物語』〈労働旬報社〉所収)。

問一 6・7行め「くらしにこまるようなことはなかったが、そうかといって、テレビを買うほどのゆとりはなかったのである」とあります。かつおは家庭の事情をわかった上で、おとうさんにテレビを買ってほしいとねだってみました。おとうさんが『なにに? テレビ?』と、かつおの顔をにらむようにながめた(3・4行め)ので、やっぱり無理なんだなと思っています。

問二 16・17行め「おまえの友だちでも、テレビがあるのは、みなりっぱな家ばかりじゃないか」とあるので、イ→○ 20・21行め「だからおまえは、そういうりっぱな友だちの家へ行って、いっしょにテレビを見せてもらえばいいんだ。いっしょに勉強しているなかまだ。テレビを見せてやらないなんて、いじわるはいうまい」とあるのでア・ウ→○

問三 直後に「そんなの、じょうだんだろう……と思ったからだ」とあります。「かつお、きょうは、まっすぐ帰ってこいよ。テレビが来るんだから」(29行め)というおとうさんの言葉が、かつおにはとても信じられなかったのです。

問四 38行めに「まるで、空でも飛ぶような気持ちだった」とあります。かつおが幸せな気持ちになれていることがわかります。

問五 54行め「なにっ、おまえはとしおくんをうまにして、その上につけて、テレビを見る気か」とあります。そんなことを考えるかつおのことをおとうさんは情けなく思い、腹が立ったのです。

問六 直前に「かつお、おとうちゃんが、酒もたばこもやめて、テレビを買ってくれたのは、きのうおまえが、う、うまに、されているのを見たからなのだよ」というおかあさんの言葉があります。おとうさんの気持ちを、かつおは理解していませんでした。

解答

- ① 1 右折 2 良い 3 発芽 4 努める 5 祭典
6 具体的 7 協調 8 大軍 9 参考 10 省く
- ② 問一 1 イ 2 ウ 3 エ 4 ア
問二 1 エ 2 ア 3 イ 4 ウ
問三 1 ア 2 イ 3 エ 4 オ 5 ウ
- ③ 問一 [おねえちゃんの写真を] 額にいれてかざる [ため。]
問二 ウ
問三 1 I 運命のあした II 生きていかなきゃ
2 I あせったり、いそいだり II 時のながれ(時のはやさ)
問四 D
問五 志乃ちゃんが死んでしまった [日。]
問六 ウ
- ④ 問一 A エ B イ C ウ
問二 ア 問三 ア
問四 うまくお 問五 よそもん
問六 ぼくに家に呼べるような新しい友だちができないこと。
問七 イ

解説

- ③ 出典は、今村葦子「ひとりたりない」〈理論社〉。
- 問一 50・51行めに「私は自分の部屋から持ってきた額に、私とおばあちゃんがえらんだ、おねえちゃんのすてきな写真をいれてかざりました」とあります。
- 問二 すぐ後に、「ふたりはなんだか、ものすごく若く見えるのです」とあり、琴乃は今の両親の様子と比べてショックを受けていると考えられます。今は「とくいそうであわせそう」ではないのでしょうか。
- 問三 1…おばあちゃんの言葉の中に、「『そうさ。……運命のあしたはわからないって、そのことはわかっているのにね。それでも人間は生きていかなきゃいけないんだよ。生まれてきたからにはね』」(26・27行め)とあります。2…同じようにおばあちゃんの言葉に、「『どんなことがおきようと、時は時のはやさでしか、すぎてゆかないんだよ。だからこっちも、一步一步、着実に、ふだんどおり、時のながれにのって歩いてゆくのが、たったひとつの正しいやり方なんだよ。だって、それ以外に方法はないんだからね。あせったり、いそいだりすると、また、なにがおこるかわからないということになる』」(43～46行め)とあります。
- 問四 A～Cは、つらいできごとやふかいかなしみをいやす働きをする「時」の意味です。Dはごはんのしたくをする「時刻」のことです。

問五 22・23行めに「こんなつまらないおばあさんが生きていて、志乃ちゃんが死んでしまったのか」とあります。

問六 お線香の用意をしていなかったということですから、それくらい突然のできごとであったことが考えられます。

④ 出典は、宮下恵菜「真夜中のカカシデイズ」〈学研プラス〉。

問一 Aはすぐ前にあるように、「どのタイミングでその輪に入ればいいのかがわからなくて」うろたえる様子なので、「まごまご」が入ります。Bは宿題を早く終わらせる様子なので、「はやばや」が入ります。Cはみがかれた床を説明することばなので「ぴかぴか」が入ります。

問二 「蚊の鳴くような声」とはかすかな弱々しい声のことです。上級生にどなりつけられたのですから、強く言い返すことのできない「ぼく」の様子が想像できます。

問三 「鼻で笑う」とは、相手を見下して冷たくあざけり笑うことです。

問四 お母さんは家庭訪問のときに、先生に「あの子、ちょっと引込み思案なところがあるので、うまくお友だちの輪に入れないんじゃないかと思ひまして……」(51・52行め)と先生に相談しています。

問五 文章前半の初めてじゃんけんの輪にいれてもらった場面です。じゃんけんのタイミングが合わず、上級生から『ああ、よそもんか。』(23行め)とされています。よそもん、つまり別の所の人間ということ。

問六 傍線部より前の内容を確認しましょう。母に友だちを連れてきてもよいと言われているのに、「そう言われても、ぼくには家に呼べるような友だちがいんだからしょうがない」、「班活動なんかでは自然と話ができるのに、そこから特別に約束をして遊ぶというのが、どうすればいいのかわからない」(44～46行め)とありますね。ここの部分をまとめていきましょう。

問七 グラウンドを走りまわるクラスの子たちを見て、「(どうしてぼくは、あの中に入っていけないんだろう?)」(66行め)、「楽しそうに声を上げて笑うみんなの顔が、ふいににじむ」(67行め)とあり、悲しい気持ちわいてきていることがわかります。